

自尊感情と性格および感情の関係

塗師 斌

Self-esteem: Its relation to Personality and Affectivity

Akira NUSHI

問題と目的

Watson ら (2002) は、全体的な自尊感情 *global self esteem* (以降、単に自尊感情と呼ぶ) に関して、性格と感情との関係を相関係数や確認的因子分析を用いて調べ、以下のような結果を得ている。

1. 自尊感情は、神経症傾向 *Neuroticism*、否定的感情 *Negative Affectivity* と高い負の相関があった。
2. 自尊感情は、外向性 *Extraversion*、肯定的感情 *Positive Affectivity* と中程度に高い正の相関があった。
3. 自尊感情は、改訂版 NEO 性格検査の神経症傾向のファセット *facet* (下位尺度) である抑うつと -0.79 という高い負の相関があった。
4. 確認的因子分析の結果、自尊感情と抑うつの間には、 -0.82 や -0.86 という非常に高い負の相関が見られた。
5. 以上のことから自尊感情は、一方の極が抑うつである双極次元のもう一方の極であることが示唆される。

ここで Watson らが用いている尺度は、自尊感情として Rosenberg (1965) の自尊感情尺度、性格として John らによる Big Five 性格検査 (BFI) の 5 尺度 (神経症傾向、外向性、誠実性 *Conscientiousness*、調和性 *Agreeableness*、開放性 *Openness to Experience*) および Costa らによる改訂版の NEO 性格検査 (NEO-PI-R) のファセット (神経症傾向、外向性、開放性それぞれの下位尺度)、感情として Watson ら (1988) による PANAS (*Positive and Negative Affect Schedule*) の肯定的感情と否定的感情の特性版 (*trait version*) の尺度である。

しかし Watson ら (2002) の得たこのような結果が、日本でもそのままあてはまるものかどうかまったく保証がない。そこで本研究では上記の 1~5 に基づく以下の仮説が日本でも同様に当てはまるかどうかを検証することを第 1 の目的とする。

仮説1 自尊感情は、神経症傾向と高い負の相関、外向性と中程度に高い正の相関がある。

仮説2 自尊感情は、否定的感情と高い負の相関、肯定的感情と中程度に高い正の相関がある。

仮説3 自尊感情は、神経症傾向のファセットである抑うつと特に高い負の相関があり、一方の極が抑うつである双極次元のもう一方の極であるとみなすことができる。

さらに本研究の第 2 の目的は、Watson ら (2002) が感情として肯定的感情、否定的感情という全体的な感情しか用いていないことに鑑み、本研究では活動的快、抑うつ・不安等の 8 種類の下位尺

度を持つ寺崎ら(1991)の多面的感情状態尺度・短縮版を用いて、より具体的に自尊感情、性格、感情の関係を明らかにすることである。

方 法

横浜国立大学の大学生 287 人 (男 138 人、女 148 人、不明 1 人) を調査対象として、2003 年 7 月に集合調査を行った。他にも調査項目は含まれていたが、本研究に関わる調査内容は以下の通りで、この順序で実施した。分析は男女別に行った。

1. 多面的感情尺度・短縮版 (寺崎・古賀・岸本、1991)

現在の感情状態を、“全く感じていない” から “非常に感じている” までの 4 段階で評定。活動的快、非活動的快、抑うつ・不安、倦怠、親和、敵意、集中、驚愕の 8 尺度からなり、各尺度は 5 項目で構成されている。

2. 一般感情尺度 (小川・門地・菊谷・鈴木、2000)

現在の感情状態を、“全く感じていない” から “非常に感じている” までの 4 段階で評定。一般感情尺度は肯定的感情 (PA) 尺度、否定的感情 (NA) 尺度、安静状態 (CA) 尺度からなり、各尺度は 8 項目で構成されている。

3. 和田(1996)の Big Five 尺度に対応する 5 因子の尺度全 60 項目

評定尺度は “全然あてはまらない” から “非常にあてはまる” までの 7 件法。

4. 辻ら(1998)による 5 因子性格検査 (FFPQ) の「情動性」—「非情動性」に含まれる 5 つの要素特性 (ファセットに相当) である心配性、緊張、抑うつ、自己批判、気分変動各 6 項目、および「外向性—内向性」に含まれる 5 つの要素特性である活動、支配、群居、興奮追及、注意獲得各 6 項目。本研究では仮説 3 における「神経症傾向のファセットである抑うつ尺度」として、辻ら(1998)の要素特性の抑うつを用いる。

評定尺度は “全然あてはまらない” から “非常にあてはまる” までの 7 件法。

5. Rosenberg(1965)の自尊感情尺度 (山本・松井・山成による邦訳版、1982)

評定尺度は “あてはまらない” から “あてはまる” までの 5 件法。

結果と考察

1. 自尊感情尺度と Big Five 尺度の関係 (仮説 1 の検証)

Rosenberg の自尊感情尺度と和田(1996)の Big Five 尺度との相関係数と無相関検定の結果を表 1 に示す。

表1 自尊感情とBig Five尺度の相関係数(男性138名、女性148名)

	外向性	神経質	開放性	誠実性	調和性
男性	0.591***	-0.604***	0.488***	0.144	0.251**
女性	0.400***	-0.619***	0.203*	0.036	0.339***

(* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$)

表 1 から男女とも誠実性を除く Big Five の他の 4 尺度と自尊感情の間に有意な相関が見られることがわかる。特に神経症傾向および外向性との相関は男女ともかなり高い。これは自尊感情が高いほど神経症傾向が低く、外向性が高い傾向を示すものである。

仮説1の検証を試みても、確かに自尊感情は男女とも神経症傾向と最も相関が(負で)高く、次いで外向性との相関が(正で)高くなっている。男性についてはあまり大きな差は見られないにしても、この結果は仮説1を支持する結果とみなすことができよう。なお、Watsonら(2002)は、先行研究の結果から、自尊感情と神経症傾向との間に -0.50 を超える相関、自尊感情と外向性との間に、神経症傾向とよりはいくぶん低い $0.30\sim 0.50$ という中程度の相関が一般に得られていることを指摘しているが、このことは男性の外向性を除けば表1にもあてはまる。

他の尺度についてみると、開放性との相関は男性の方が高く、調和性との相関は女性の方が高くなっている。これは男性、女性に関わる社会的望ましさを反映していると考えられることもでき、興味深い。なお、Watsonら(2002)は、先行研究の結果から、自尊感情とBig Fiveの誠実性、調和性、開放性との関係については、誠実性とは $0.20\sim 0.43$ (中央値は 0.32)、調和性とは $0.11\sim 0.32$ (中央値は 0.16)、開放性とは $0.09\sim 0.31$ (中央値は 0.19)の相関が得られていることを指摘しているが、このことは表1にはそのまま適用できない。というのは、表1ではたとえば男女とも誠実性との相関が見られず、また男性の自尊感情と開放性の相関が 0.488 と大きくなっているからである。

2. 自尊感情尺度と一般感情尺度の関係(仮説2の検証)

Rosenbergの自尊感情尺度と小川ら(2000)の一般感情尺度との相関係数と無相関検定の結果を表2に示す。

表2 自尊感情と一般感情尺度の相関係数(男性138名、女性148名)

	肯定的感情	否定的感情	安静状態
男性	0.279**	-0.176*	0.011
女性	0.236**	-0.166*	0.158

(* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$)

表2から明らかなように、男女とも自尊感情は肯定的感情、否定的感情と無相関検定では有意である。しかし相関係数の絶対値はそれほど高くなく、特に否定的感情とは 0.2 を下回る値である。ここで相関係数の絶対値が 0.2 以上を関係があるとみなす最低基準とすれば(以降の考察においてもこの基準を用いる)、仮説2の肯定的感情との関連については支持されたものの、否定的感情との関係は支持されなかったことになる。Watsonら(2002)は、自尊感情と感情の関係について、たとえばRosenbergの自尊感情尺度が、肯定的感情および否定的感情と中程度の相関ないし高い相関があることがいくつかの先行研究で示されてきているとしているが、本研究では無相関検定で有意であるにしても、特に否定的感情ではそのように高い相関は得られなかった。したがって、結論的に「自尊感情は、否定的感情と高い負の相関、肯定的感情と中程度の高い負の相関がある」という仮説2は支持されなかったといえよう。その理由の一つとして、本研究で用いた小川ら(2000)の肯定的感情尺度、否定的感情尺度と、先行研究で用いられたWatsonら(1988)によるPANASの肯定的感情と否定的感情の特性版(trait version)の尺度との違いが考えられる。小川ら(2000)はWatsonら(1988)の項目も含めて肯定的感情尺度、否定的感情尺度の作成を行っているが、最終的に尺度に含まれた項目はWatsonら(1988)の尺度項目とは同一ではない。また、Watsonら(1988)の尺度は特性版であるのに対し、小川ら(2000)の尺度は「現在感じている状態」を尋ねる状態版であることによる違いも大きいと考えられる。その他の理由として、日本とアメリカではそもそも自尊感情と感情の関係の様相が異なるということも考えられるが、本研究のデータからは、これ以上のこと

は言えない。

3. Big Five 尺度と一般感情尺度の関係

和田(1996)のBig Five尺度と小川ら(2000)の一般感情尺度の相関係数と無相関検定の結果を男女別に表3と表4に示す。なお外向性と肯定的感情の相関を求める際、「陽気な」という形容語が双方に含まれているため、これを除いて相関を求めた。

表3 男性におけるBig Five尺度と一般感情の相関係数(138名)

	外向性	神経質	開放性	誠実性	調和性
肯定的感情	0.374***	-0.268**	0.155	0.149	0.258*
否定的感情	-0.160	0.346***	-0.137	-0.036	-0.119
安静状態	-0.080	-0.104	0.060	-0.027	0.026

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

表4 女性におけるBig Five尺度と一般感情の相関係数(148名)

	外向性	神経質	開放性	誠実性	調和性
肯定的感情	0.423***	-0.346***	0.038	0.191*	0.282**
否定的感情	-0.068	0.277**	0.034	-0.161	-0.142
安静状態	0.080	-0.287***	0.227**	-0.064	0.158

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

表3と表4の結果から、以下のことがいえよう。

- ① 外向性は男女とも肯定的感情と正の相関がある。この結果と、「結果と考察」の1. で支持された仮説1(自尊感情は外向性と中程度の高い相関がある)および「結果と考察」の2. での結果(自尊感情と肯定的感情の相関はそれほど高くないが、無相関検定では有意である)を関連づけて考えると、自尊感情は肯定的感情に直接的に一定程度の影響を与えるだけでなく、外向性を経由して間接的に肯定的感情に大きな影響を与えていることが示唆される。
- ② 神経症傾向は男女とも肯定的感情と負の相関があり、否定的感情と正の相関がある。この結果と、「結果と考察」の1. で支持された仮説1(自尊感情は神経症傾向と高い負の相関がある)および「結果と考察」の2. での結果(自尊感情と肯定的感情、否定的感情との相関は無相関検定では有意であるが、肯定的感情とはそれほど高くなく、また否定的感情とは低い)を関連づけて考えると、自尊感情は神経症傾向を経由して間接的に肯定的感情や否定的感情に大きな影響を与えているのではないかと考えられる。
- ③ 調和性は男女とも肯定的感情と正の相関がある。

なお、安静状態については男女間で違いが見られ、女性では神経症傾向と負の相関、開放性と正の相関が見られるのに対して、男性ではBig Five尺度のいずれとも関連が見られなかった。

4. 自尊感情尺度と神経症傾向のファセット特に抑うつとの関係(仮説3の検証)

Rosenbergの自尊感情尺度と、辻ら(1998)による「情動性」—「非情動性」に含まれる要素特性(ファセットに相当)である心配性、緊張、抑うつ、自己批判、気分変動との相関係数と無相関検定の結果を表5に示す。

表5 自尊感情と情動性の要素特性の相関係数(男性138名、女性148名)

	心配性	緊張	抑うつ	自己批判	気分変動
男性	-0.543***	-0.421***	-0.644***	-0.818***	-0.297***
女性	-0.542***	-0.326***	-0.610***	-0.824***	-0.224**

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

仮説3の検証を試みてみると、自尊感情と抑うつとの相関は男女とも絶対値が0.6を超えるかなり高い値になっており、仮説3の「抑うつと特に高い負の相関があり」という部分を支持する結果である。しかしながら、同じ情動性に含まれる要素特性である自己批判との相関の方が、男女とも絶対値が0.8を超え、抑うつとの相関よりもはるかに大きくなっている。確かに自己批判に含まれる項目内容をみると、「自分には全然価値がないように思えることがある」、「自分がみじめな人間に思える」等の自尊感情尺度の項目内容に類似した項目が含まれており、FFPQの要素特性の中では、自己批判の方が抑うつよりも、自尊感情を一方の極とする双極次元の他方の極として適当である。したがって、本研究の結果からは、仮説3は支持されなかったものと判断した。

自尊感情とBig Fiveのファセットとの関係についてWatsonら(2002)は、唯一その関係を調べたFurrとFunder(1998)の研究結果を報告している。FurrとFunder(1998)は、Rosenbergの自尊感情尺度とNEO性格検査の神経症傾向、外向性、開放性のファセット尺度との相関を調べ、たとえば同じ神経症傾向でもファセットにより自尊感情との相関が大きく異なり、衝動性のようになり0.13という相関が低いファセットもあれば、抑うつのように-0.63という高い相関をもつファセットもあることを明らかにし、Big Fiveという全体的なレベルだけではなく、ファセットのようなより下位の水準で調べることの重要性を指摘している。確かに表5からも明らかのように、同じ情動性でもファセットにより自尊感情との関係の程度が異なっており、ファセットの水準でとらえることによって関係の様相をより分析的にとらえることが可能になると考えられる。

5. 自尊感情尺度と外向性のファセットとの関係

Rosenbergの自尊感情尺度と、辻ら(1998)による「外向性」—「内向性」に含まれる要素特性(ファセットに相当)である活動、支配、群居、興奮追求、注意獲得との相関係数と無相関検定の結果を表6に示す。

表6 自尊感情と外向性の要素特性の相関係数(男性138名、女性148名)

	活動	支配	群居	興奮追求	注意獲得
男性	0.171*	0.548***	0.294***	0.345***	0.443***
女性	0.072	0.187*	0.262**	0.027	0.428***

(* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001)

表6から、自尊感情と外向性のファセットとの関係は、男女でかなり異なることがわかる。男女とも注意獲得との相関が高いということは共通しているが、男性では支配と0.5、興奮追求と0.3を超える相関が見られるのに対して、女性ではこれらのファセットとの相関は低い。これは、注意獲得という要素特性には、「注目されるとうれしい」とか「地味で目立つことはない」(反転項目)といった性差があまり考えられない項目が多いのに対して、支配や興奮追求には、「親分肌である」とか「おみこしをかついでみたい」といった性差が多少関係すると思われる項目が含まれていることが影響しているためではないかと考えられる。いずれにせよ、ファセットの水準でとらえることにより、このように自尊感情と性格との関係をより分析的にとらえることができるようになると考

えられる。

6. 自尊感情と多面的感情尺度との関係

Rosenberg の自尊感情尺度と、寺崎ら(1991)による多面的感情状態尺度・短縮版に含まれる8尺度との相関係数と無相関検定の結果を表7に示す。

表7 自尊感情と多面感情状態尺度・短縮版の相関係数

	活動的快	非活動快	親和	抑鬱不安	倦怠	敵意	集中	驚愕
男性	0.272*	-0.046	0.021	-0.444***	-0.326***	-0.092	-0.137	-0.122
女性	0.198*	-0.009	0.121	-0.430***	-0.187*	-0.217**	0.000	-0.071

(* $p < 0.05$. ** $p < 0.01$. *** $p < 0.001$)

「結果と考察」の2.で、「自尊感情は否定的感情と高い負の相関、肯定的感情とは中程度に高い相関をもつ」という仮説2が、支持されなかったことを述べた。それはあくまでも感情を、肯定的感情、否定的感情という一般感情の水準で捉えた時の結果である。その水準を落として、表7のように、感情をもっと多面的に捉えた場合にどうなるであろうか。

まず男女とも抑うつ・不安との相関が0.4を超える大きな(負の)値となっており、自尊感情の高い人は抑うつ・不安が少ない傾向を示していることがわかる。これに関して Watson ら(2002)は、Rosenberg の自尊感情尺度と、否定的感情の中の一つである抑うつとの間に高い相関のあることが、数多くの研究で示されてきている(たとえば、Furr&Funder, 1998; Joiner, 1995)と述べているが、そのことは本研究の結果についてもいえる。

次に、先にも述べたように相関係数の絶対値0.2以上を関係があるとみなす基準とすれば、自尊感情と関係があるのは、男性では倦怠と活動的快であるのに対し、女性では敵意のみというように、男女間で関係の様相が異なる。

さらに肯定的感情、否定的感情という観点から見れば、自尊感情と関係がみられたのは、8尺度のうち、肯定的感情が1(男性の活動的快)、否定的感情が3(男性と女性の抑うつ・不安、女性の敵意)で、どちらかといえば否定的感情との関係が強いといえよう。しかし抑うつ・不安を除けば相関は全体的に低く、仮説2は多面的感情の水準で捉えても、支持されなかったといえよう。

総合的考察

本研究の第1の目的は、本論文の冒頭で述べたような Watson ら(2002)が自尊感情と性格および感情の関係について得た結果が、日本でもそのままあてはまるものかどうかを検証することであった。そのため、Watson ら(2002)の得た結果を仮説1~3で表現して、その検証を試みた。その結果、仮説1は支持されたが、仮説2と3は支持されなかった。但し、仮説2と3については、以下に述べるように、必ずしもこのように明確に結論を断言できるものではないということをおきたい。

仮説2に関して、肯定的感情との相関が0.2以上であったが、この結果を無相関検定も有意であったことから、自尊感情と関係があるとするのも可能であろうし、逆にこの位の値ではそうはいえないとするのも可能であろう。しかし否定的感情との関係については、仮説では「否定的感情とは高い負の相関」となっているので、-0.17程度ではとても仮説が支持されたとはいえないであろう。ただここで留意しておきたいのは、先行研究では特性版の感情を用いているのに対し、本研究では被験者の答えやすさも考え「現在のどの程度感じているか」という状態版の感情を用いている

ことである。もしかしたら、特性版の感情にすれば、仮説通りの結果が得られるのか、これは今後の課題である。

仮説3に関して自尊感情と抑うつとの相関は0.6を超えているのであるから、抑うつを自尊感情の対極においてもよいのではないかという議論も可能であろう。実際、筆者も自尊感情との相関が0.8を超える自己批判という要素特性がなければ、仮説3は支持されたとしていた可能性もある。ここには双極性をどのように捉えるかという問題も絡んでくる。対極を180度反対の方向の極として捉えるか、それとも180度ではなく一定範囲のずれを認めるのかといった問題である。対語が一般に必ずしも180度反対であるとはいえないSD法的な観点に立てば、一定範囲のずれを認めることになるだろうが、本研究で得られた0.6という相関では説明率が50%にも満たないので、自尊感情と抑うつを双極性尺度の両極と考えるのは無理があるのではないかと思われる。

本研究の第2の目的は、Watsonら(2002)が感情として肯定的感情、否定的感情という全体的な感情しか用いていないのに対して、活動的快、抑うつ・不安等の8種類の下位尺度を持つ寺崎ら(1991)の多面的感情状態尺度・短縮版を用いて、より具体的に自尊感情、性格、感情の関係を明らかにすることであった。その結果、「結果と考察」の6.で述べたように、自尊感情は男女とも否定的感情の中の抑うつ・不安と負の相関が大きいことや、男性では自尊感情は倦怠や活動的快と関係があるのに対し、女性では敵意と関係があるといった性差が見られることが明らかになった。

本研究では先行研究の多くが男女込みで分析を行っているのに対し、性別に分析を行った。これは、自尊感情、性格、感情といった領域では性差が見られるのではないかと考えたためである。実際に、自尊感情とBig Five、ファセット、多面的感情状態との相関は、男女間で共通点は多いものの一部は異なっており、たとえばBig Fiveの開放性との相関は男性の方が高く、調和性の相関は女性の方が高いといった性差が認められた。また多面的感情状態との相関も男女間で異なっているなど、性別に分析を行った意義はあったものと思われる。

今後の課題として、自尊感情、性格、感情の相互関係や因果関係をモデル化し、共分散構造分析法等を用いて、それらのモデルの妥当性を検証していくことが挙げられる。たとえば、本研究において、自尊感情は神経症傾向や外向性といった性格を経由して感情に間接的に影響を与えているということを述べたが、このような間接効果がどの程度あるのか、直接効果と比べてどうなのかといったことを、共分散構造分析法の適用により明らかにしていく必要があるだろう。また、自尊感情、性格、感情といっても、本研究ではそれぞれ1種の尺度を用いたにすぎない。たとえば別の性格検査や感情の尺度を用いれば結果が大きく異なってくることも考えられる。特に本研究では感情の尺度として状態尺度を用いたが、特性尺度を用いた場合とどの程度異なるかの検討が必要である。これらは今後の課題である。

文献

- Furr, R. M., & Funder, D. C. 1998 A multimodal analysis of personal negativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1580-1591.
- Joiner, T. E. Jr. 1995 The price of soliciting and receiving negative feedback: Self-verification theory as a vulnerability to depression theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 2000 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 1991 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 日本心理学会第55回発表論文集, 435.
- 辻平治郎(編) 1998 5因子性格理論の理論と実際 北大路書房
- 和田さゆり 1996 性格特性語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- Watson, D., Suls, J., & Haig, J. 2002 Global Self-Esteem in Relation to Structural Models of Personality and Affectivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 185-197.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.